



TITLE:

<大會抄録>五四運動におけるプロレタリアートの役割について

AUTHOR(S):

狭間, 直樹

CITATION:

狭間, 直樹. <大會抄録>五四運動におけるプロレタリアートの役割について. 東洋史研究 1978, 37(3): 455-455

ISSUE DATE:

1978-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153698>

RIGHT:

武力蜂起とも關係薄かった。その上新興サウディ・アラビア國王イブン・サウドがオランダの要請を容れて彼等の逮捕に踏み切ったことは、全世界に反響を起こし、オランダの立場を苦しいものにした。

五四運動におけるプロレタリアートの役割について

狹間直樹

五四運動が中國近代史上の劃期的事件であることは、だれしもの認めるところである。その劃期性については、毛澤東の指摘にもとづき舊民主主義革命から新民主主義革命への轉換點ととらえる觀點をほぼ定説としてよいだろう。新民主主義革命の内容規定としてふつう挙げられるのは、①プロレタリアートの指導、②人民大衆の参加、③反帝國主義・反封建主義の性格、の三つの指標である。

これらの三指標は、いうまでもなくたがいに関連しあうものであるが、とくに第一項については五四運動を新民主主義革命の開始と認める研究者のあいだでも評價がわかれ、論争がおこなわれてきた。かつて一九六〇年代のはじめに中國でおこなわれた一連の論争は、プロレタリアートの指導を確認することで一應の結着がつけられたかのごとくであるが、ちかごろのわが國の研究では、たとえば徳毛和子氏のようにブルジョアジーによる指導との見解もだされるにいたっている。

プロレタリアートの指導を云々するためには、その階級的形成と運動のなかではたした役割についての評價をまず確定せねばならない。六三後における罷工・罷学・罷官の具體的分析を通じて上述の課題にたいする卑見をのべたいと思う。

元末明初の西系紅巾について

野口鐵郎

元末の混亂の中に生起した紅巾勢力には、大別して二つの流れがあったことは周知のことである。そのうち、白蓮教系とも東系とも呼ばれている部分に次の王朝の創建者朱元璋が係わっていたが、長江中流域から上流にかけての江西・湖廣・四川などを基盤としたいわゆる西系紅巾は、朱政權と敵対し、やがてその前に屈伏してしまふ。

本日は、この西系紅巾の構成要素、それと朱政權との關係にしばらく報告し、ご叱正を得たいと思う。

西系紅巾集團を構成する諸要素は、東系紅巾におけるそれの如くではない。少くとも、彌勒下生信仰集團と子元系「普」字信仰集團の二つの宗教的集團が武力的集團と結びついて存在し、ときに両者は混淆する様相を見せながらも、それぞれ別個のものとして活動し、對抗していた。いわば、宗教的には、徐壽輝——明玉珍の派と陳友諒の派とがあったのであって、しかも、前者にはその宗教に基く世界出現の姿勢がみられ、後者には武力的集團としての色彩が強